

長岡地区租税教育推進協議会長賞 佳作

国を動かす税金の力

新潟県立長岡高等学校

二年 村上 正之輔

「税」という文字は、稲という意味を表す「朱」と人から何かを引き離すという意味を表す「兌」という文字から成り立っているようだ。つまり、税金という言葉自体、人からお金を取るという意味をもっている。また、納税は日本国民の義務である。当然従うべきことという私たちからすると受動的な意味をもつ義務という言葉。これらから私たち日本人が、「自ら納める」というよりも「取られる」という表現を税金に対して多用していることは本来、自然なことなのかもしれない。

納税は国や地方公共団体が公共サービスなどの財源を得るために国民や企業に課した義務であることは先に述べたように周知の事実だろう。日本国民が健康で文化的な生活を送るために税金は必要不可欠だと思う。しかし税金は公共サービスの「対価」ではない。納税の金額が高くて低くても基本的に同じ公共サービスを受けることできる。経済的に納税はおろか日々の暮らしもままならない人は、生活保護という健康で文化的な最低限度の生活を保障する公的扶助制度を受けられることもできるそうだ。無論、そのような人々は税金で税金

を納めていることになるが、彼らに消防車や救急車が利用できないということはない。つまり納税という制度は、納税者の納税額の点から言えば公平さに欠けると言わざるを得ない。先日、図書館で「お金の流れでわかる世界の歴史」という名だたる古代帝国の税制について解説されている本を読んだ。その中の一つに古代ローマ帝国の税制が載っていた。今から約二千年前、古代ローマ帝国ではアウグストゥスが初代皇帝に即位してから二百年以上も平和が保たれ大繁栄を遂げたという。それはなぜなのか。その答えは初代皇帝アウグストゥスが築き上げた税制の維持の徹底にある。その税制の特徴は課税額が低く累進課税のような制度がないことである。そのような少ない税収では広大な帝国を維持できないと思われるかもしれないが、古代ローマ帝国では公共施設にお金を出した人にはその施設に自分の名前を付けることを認め、お金持ちの莫大な収益を市民に還元させ帝国を維持したのだ。私は今の日本ではあまり感じない輝かしい相互扶助の精神と税制に感動した。

古代ローマ帝国はこのように繁栄したが、最終的には滅亡している。原因はやはり税制であり、うまく税を徴収できなくなったのだ。この他にも古代エジプト、フランス王朝などさまざまな国々が税制問題で滅亡している。つまり税金は国を維持するには欠かせないものだ。そんな税金に対して借金大国日本に住む者としてもっと真剣に向き合う必要がある。税金に対して漠然と「取られる」と表現したり不平等と家で文句を言うのではなく、税金に対して関心をもって自分の考えを深めることが大切だ。その考えの下、責任をもって税制に関わる議員に投票したならば「取られる」という表現はで

きなくなるはずだ。